

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	15H05790	研究期間	平成27(2015)年度 ～令和元(2019)年度
研究課題名	皮膚を場とする外的刺激に対する生体応答機構の包括的解明	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	梶島 健治 (京都大学・医学研究科・教授)

【平成30(2018)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○ A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、外的侵襲に対して上皮・免疫・間質細胞の免疫応答機構とその意義を包括的に解析し、また、皮膚構成細胞・構造物、シグナル伝達などの細胞機能の可視化システムの確立を目指している。

これまでにマウス皮膚で樹状細胞、T細胞の可視化技術を確立している。また、皮膚炎での自己抗体透過性亢進、乾癬型炎症の機序、皮疹での誘導型皮膚関連リンパ様組織の検出、かゆみ起因性サイトカイン阻害の臨床的効果を明らかにしており、着実に成果を上げている。

【令和3(2021)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待以上の成果があった。
A+	<p>具体的には、誘導型皮膚関連リンパ様組織 (iSALT) の構築維持や制御の仕組みを細胞並びに分子レベルで解明したこと、抗体の血管-皮膚輸送機構を解明したこと、明らかにしたかゆみ誘発機構を基盤とした IL-31 受容体標的治療が臨床で良好な成果をもたらしていることが挙げられる。これら一連の研究成果は、新たな関連皮膚病態を細胞分子レベルで解く糸口を提供するとともに、導かれた分子理論は、自己免疫皮膚疾患の臨床応用研究へと展開するに至っている。</p> <p>これらから、当初設定した高い目標を完遂するのみならず、期待以上の卓越した独創的な成果をあげていると評価できる。</p> <p>さらに、国際的に著名な学術雑誌や学会に研究成果が多数公表されており、成果の公表という面でも申し分ない。</p>